
いちにちひとつぶ2

おじい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いちにちひとつぶ2

【Nコード】

N0780Y

【作者名】

おじい

【あらすじ】

作品テーマは『いちにちひとつぶ』と同じく『幸せ』。

食事も心もバランスが大切。ということ、この物語はカロリー高め、煩惱と欲望多め、ビタミン、ミネラル、鉄分、ハラハラドキドキ、光と闇をバランス良く配合した心の栄養コメディーを目指してまいります。

処女作「いちにちひとつぶ」の続編ですが、この物語単体でお読

みいただける仕様となっております。

さくらんぼ少年と歩く嫌がらせの再会（前書き）

R15指定ではございませんが、お下品な表現を含みますのであらかじめご了承ください。

さくらんぼ少年と歩く嫌がらせの再会

この世にも存在する天国と地獄。俺はそのどちらも知っている。しかし神様というものは、天国へ行くことをたまにしか許してくれない。けれど、それでも全く行けないよりは幸せなのだろう。

磐城広視^{いわしろひろし}、高校2年生、17歳。旅行が趣味で、主に日雇いのアルバイトをしながらお金を貯めて、おトクなきつぷを発売している東北地方や北陸地方を中心に旅行している。つい3週間ほど前には1日1万円で列車に乗り放題のきつぷを使って青森まで旅行したばかりだ。

7月下旬、夏休みに入り、多過ぎてやる気のしない宿題は後回しにするとして、やる事のない俺は隣の広い芝生の公園で出店^{でみせ}のボランティアをしている。どこかの電柱に貼ってあった要員募集の告知を見たのが参加のきっかけだ。お金が欲しいけど珍しくボランティア。タダ働き。なんて模範的な高校生だろう。俺って偉い！！

出店は焼きそば、かき氷、綿菓子、射的、金魚掬いなどといった定番の屋台がずらりと並んでいる。今日は神輿^{みこし}が街中を練り歩く市を挙げての大きなお祭りだ。その中で俺はハンバーガーの屋台を担当する事になり、な、なんと綺麗なお姉さんと一緒に働くことになった！！ うん、たまらんのう。

長くて綺麗な黒髪、程良くびれ、そして気さくで家庭的な性格いや、最後のはどうだか解らんが、きつとそんな性格だと思う。

「おはようございます。大甕おおみかつていいいます。今日はよろしくね」

「おはようございます。警城いわたしろです。よろしく願います」

「警城くん…？ 頑張ろうね！」

「はいっ！」

大甕さん？ どっかで聞いたことある苗字だな。向こうも俺の苗字に何か引つ掛かるものがあるみたいだし、前にどっかで会ったっけ？ けどこんな綺麗なお姉さん、俺が忘れる訳ないし…。うっん、謎だなあ。

「一つ下さーい！！」

「こっちは二つ！！」

「「はい！！」」

考えてる間もなくお客さんがどっと押し寄せる。

ジューツ！！

「あちっ！」

へらに乗せた肉を鉄板に置いた途端、調理油が跳ねて俺の両腕を散弾銃の弾のように直撃した。肉を置く時はもっと慎重にやらなきゃな。

「大丈夫！？」

「はいっ！ すんません！」

心配してくれた大甕さんは、少し慌てながら黄色い手拭いをポケットから取り出して俺の腕を拭いてくれた。その優しさに感動した俺は、何故かお礼の言葉さえも出ずに、胸がつかえていた。失礼な態度をとってしまったな。仕事が落ち着いたらちゃんとお礼を言う。

俺と大甕さんは速やかに手を消毒し直して仕事に戻った。鉄板上で美味しそうに音を立てる肉厚でジューシーなハンバーグ。それをミディアム程度に焼き上げる。自分で焼いてて食べないなんて、ちくしょう。

俺は食欲を抑えつつ、急いで三つのハンバーグを同時に焼き、大甕さんは焼き上がったそれをタレに浸し、レタス、トマト、タマネギをバンズに挟んでお客さんに手渡す。そんな作業が休みなく3時間ほど続いた。喉は酷く渇くし汗だくだし、腕が棒のようだ。なんか頭がぼーっとする。ちなみに『バンズ』とはハンバーガーに使う上下セットのパンの事で、下部を靴に例えて『ヒール』、上部を冠かんむりに例えて『クラウン』と呼ぶ。それらを組み合わせたものが『バンズ』である。

「ふう、やっと落ち着いたね。磐城くん、ハンバーグ2つ焼いてもらえる？」

「うつつす」

大甕さんに頼まれて、腕が疲れているのでぶつちやけ面倒と思いつながら綺麗なお姉さんの頼みは断れず、ハンバーグを2つ焼き上げると、彼女は先程までと同様、タレに浸して野菜を挟み、ハンバーグが二つ出来た。作り置きか？

「はい、どうぞ」

ドキッ！ 接客中も思ってたけど手渡す時の笑顔が素敵だぜ。

「あつ、ありがとうございます」

ハンバーグを差し出され、俺は少し緊張しながら右手で受け取った。なるほど、賄いつてやつか。では早速いただく。

「いただきます」

「はい。私もいただきます」

一口パクリ。うん、美味い。肉と野菜のバランスが程良く、スライスされたタマネギのシャキシャキッ！ とした食感がたまらない。

「おいしいね」

「はい。あつ、さっきは手拭い貸してくれて、ありがとうございます」

「どづいたしまして。火傷、大丈夫？」

「はい、大丈夫です」

「そうか。なら良かった」

にこつと笑む浸地さん。俺のこと心配してくれて、優しい女性なのだろう。モテない俺にそんな眩し過ぎる笑顔をやら心配やらされたらガチ惚れしちまうじゃねえか。

.....。

少しの間、会話が切り出せなくてなんとなく気まずくなっていると、それを察してか、大甕さんが話題を振ってくれた。

「警城くんって、高校生だよね？」

「はい、2年生です」

「学校どこ？」

「湘南です」

「湘南！？ すごいね！」

「ごめんなさい湘南海岸学院です」

湘南高校は県内屈指の進学校で、有名人だと石原東京都知事が卒業生である。対して湘南海岸学院は、進学を目指す生徒と就職を目指す生徒を分けて教育する学校で、偏差値は上から下まで誰でも来いなので、エリートは勿論、俺みたいにお勉強が得意じゃなくても入れる。

「おつ、私の後輩さんか。部活は何かやってるの？」

俺が出身校の後輩である事にあまり驚きを示さないのも無理ない。なんてったって全校生徒約2000人のマンモス校で、全国から生徒が集まる高校でもあり、市内では高校生の6割以上がその生徒らしい。隣町在住の俺でもその生徒である事は決して珍しくない。

「部活は軽音部です」

「そうなんだ！ 私も軽音部だったよ。箱根合宿楽しいよね」

おお！ 何この運命的な一致！ いやでも、軽音部の部員数は校内で最多の150人を超える大所帯だし、冷静に考えると同じ部活に入る確率は低くないんだよな。

「箱根は温泉入れるのがたまらんですね。でも今年は福島で合宿なんですよ。いつも使ってる箱根の旅館が部員の数だけ部屋が空いてないとかで、校長の知り合いがやってる旅館に泊まるんです。まあ俺は福島県生まれなんで、懐かしい感じで楽しみですよ」

そう、今年は毎年行われる合宿を地元に近い箱根から福島県の内陸部、会津へ変更となった。

大きな湖や温泉があり、春から秋にかけてはとても過ごしやすい場所、特に10月から11月にかけての紅葉の季節は素晴らしい。五色沼ごしきぬまという沼では、瑠璃色るりいろの透き通る水面みなもと、息を呑むほどの真っ赤な紅葉のコントラストが心地良くて都会の疲れを癒してくれる。それに加え、思わず息を呑んでしまうほどの迫力があり、夢の世界に引き込まれたかのような気分にしてくれる。ああいつのを圧巻というのだろ。即座に出て来る言葉は「すげえ」の一言に尽きる。

冬は雪がどつさり積もって極寒だが、スキーの世界大会が行われるほどのウインタースポーツの名所でもある。

「そうなんだあ。私も福島県生まれでさ、小さい頃ばあちゃん家に遊びに行った時、隣の家の子とよく遊んでね、あつ…」

あつ、俺も思い出したぞ。トラウマとなった物凄く嫌な過去を。

「もしかして磐城くんって…」

「まさか、大甕さんって、悪ガキ浸地ひたち!？」

「やっぱり!! あの時の広視か!! 元気だった!？」

マジかよ!？ 小さいころ俺を散々痛め付けた悪ガキ浸地かよ!？ なんとなくそうじゃないかとは思ってたけど、まさか悪ガキ浸地がこんな美人な訳ないと信じてたのに!! 不覚だ、10年以上会ってなかったとはいえ、こんな奴に一目惚れしたなんて、一生の不覚だ。まだまだ俺には人を見る目がないな。

「ああ、まあ」

「それにしても広視変わったね。遅くなった。小さい頃は大人しくて、でも虫が怖くてよく大声出して泣いてたもんね」

「それはお前が俺の顔にハチなんか近付けるからだろ!!」

「違うよ、そりゃカメムシとかジヨロウグモを顔にくつつけて泣かせた事はあったけど、あれはハチじゃなくてトンボだよ。それなのに、刺される刺されるうっって大泣きしながら逃げ回って」

「嘘つけ！ トンボと八チ全然違うだろ！」

そう、悪ガキ浸地といえば、福島県のばあちゃん家の隣ん家の孫で、俺より5歳上のお転婆娘。嫌がる俺を無理矢理引きずり回して顔にでっかいアオムシとかくっつけてきたり、近くの湖で綺麗な夕焼けを見せてくれたと思ったらウシガエルで顔面パンチしてきたり、散々な目に遭わされた記憶がトラウマになっている。それに浸地も嫌がらせした自覚あるんだな！ カムムシとかジヨロウグモって、明らかに悪意あるだろ！ そっぴや浸地に虫くっつけられた後に家中激臭が立ち込めた事あったな。あれがカムムシだったのか。

「本当だつて。八チは刺されたら危ないからくっつけないよ〜」

それにしても、女ってこんなに変わるもんなのか。『歩く嫌がらせ』が今となつてはすっかり大和撫子やまとなでしこだもん。これなら女優になれるんじゃない？ 仲間由紀恵みたいな感じのキャラで。

「おつかれさまでしたー！！」

夕方16時半頃、祭りが終わり、俺たちボランティアはその後片付けを終えて自治会や他のメンバー同士で集まり挨拶をして解散となった。

その後、俺と浸地は一日中露店で働き、全身汗だくになったので、浸地の提案で近所のスーパ―銭湯で汗を流す事にした。替えのシャツはあるがトランクスは使い回しだ…。

「浸地は替えの下着あんの？」

「うづん、無いからそこで買ってくる」

言って浸地が指差した先は、公園の斜め向かいにある大型ショッ
ピングセンター。そこに行けば生活上必要な大よその物は揃うとこ
の街に住む同級生は言っていた。俺も下着を買おうかと財布を覗く
と所持金10円。5円チョコ2個買えるじゃん！！ 超リッチじゃ
ね！？ でも風呂上がりの牛乳買えねえ！！ Oh！！ Sh
it！！
しょう

「広視も替えの下着買ってた？」

「いや俺は10円しか持ってないからいいや」

「プツ…」

「いま鼻で笑ったろ！！」

やべ、でかい声出して周囲の視線を集めちゃった…。

「うん」

「認めるのかよ！！」

「だってえ、高校生で所持金10円はないでしょ！！」

「う、うるせえ！！」

「まったくしょうがないなあ、私が買ってあげるよ。お風呂入って

また同じ下着穿きたくないもんね」

「マジで！？ いいの！？ サンキュー！！！」

「うん、私も下着買いに行くからお金渡すね。じゃあまた後で」

言って浸地は俺に野口さんを二枚渡してくれた。そっぴや野口英世は福島県出身だよな。

「それとも私と一緒に下着選びに行く？」

「べ、別にお前の下着なんか興味ねえよ」

「広視の下着を一緒に選ぼうか、って意味なんだけど。顔紅くしちやって、かわいっ」

「うっ…」

こいつ、ハメやがった…。

結局、下着はそれぞれ一人で選んで購入し、俺たちは蝉たちが大合唱する桜並木の陰になって涼しい歩道を歩きながらスーパー銭湯へ向かっている。ジリジリミンミンシュワシュワツクツク。うん、夏だねえ。この歩道を北へ5分ほど進むと銭湯に到着する。

蝉の大合唱を聴いていると、なんだか虫を触れない弱い昔の自分じゃないことを浸地にアピールしたくなり、それを捕まえてみようと思った。桜の木の幹でジリジリと鳴くアブラゼミを見付け、そっ

と手を近付ける。

「蝉捕まえようとしてるの?」

「おう、もう昔の俺じゃないぜ」

問う浸地に蝉にを警戒させないよう掠れるような小声で応え、俺の手に蝉の羽が触れた瞬間だった。

「ジーツー!」

ドピュツー!」

「ぶふああつ!」

アブラゼミが俺の顔面に小便をぶっかけた!! 広視は混乱した。広視は精神的ダメージを喰らった!!

「ああ、逃げられちゃったね」

「大丈夫、次は捕まえてみせる」

しかしなかなか捕まえられず、同じ事を19回繰り返した。俺の顔面は蝉の雫で潤いたつぶりだ。

「ねえ、もう諦めたら? 広視が虫に触れるようになったのは解ったし、なんかホームレスの人みたいな臭いしてきたよ?」

「あと1回! 次で駄目だったら潔く諦めるから」

「ふうん、じゃああの子捕まえてみて」

「ん?」

おっ！ 浸地の指差す先は最後に相応しいターゲット！ シュワ
シュワーツと一際大きな声で鳴く透き通る羽に黒いボディーのコイ
ツは、日本最大の蝉、クマゼミじゃないか！！ これを捕まえたら
大手柄だ。

これまで以上にそつと近付き、これまで以上に慎重に、そつと
手を伸ばす。

「フシャーツ！！ シャシャシャシャシャシャシャツ！！」

「よつしや捕まえた！」

そんな喜びも束の間、次の瞬間、かつてない悪夢が俺を襲った。

どびゅーっ！！ しゅばばばばしゃーんっ！！

「ぐふあああああっ！！」

ああ、小便ウオツシュレットやあ。さすがクマゼミ、他の蝉とは
一味も二味も違う水勢だ。ああ、せつかく捕まえたけど、逃がさな
いと止めどない噴射で身体中びしょ濡れ&ホームレス臭だ。

さあ、行くが良い。さよなら、ばいばい。

逃がしたクマゼミは、元気良く飛んでゆくかと思った。

びゅーっぐるぐるぐるぐるーっ。

「あっ、あっ、ああ…」

「ぶはははははっ！！ もうダメだ、我慢できない！！」

悪ガキ浸地、大爆笑。ああ、悪ガキじゃなくて、もう悪いお姉さんか。この腹黒め…。

クマゼミは、俺の頭上で渦を描きながら執拗に小便を垂らしてゆく。親切なことに、蝉らしからぬ飛翔で一日中働いて汗だくになった俺の頭を洗ってくれているのだ。ああ、ありがたや〜。

小便を浴びせ続けられてどれくらい経ったか、ようやく蝉は飛び去ってくれた。捕まるつもりが、ある意味逆に捕まえられちゃった。

ああ、くせえ、ホームレス臭発してるのが自分でも判る。

「ほら、これで拭きな」

浸地はぐったり肩を落とした俺にポケットティッシュを差し出してくれた。

「サンキュー」

「ふふっ、相変わらずしょうがない子だなあ」

言いながら微笑む浸地は、なんというか可愛いとか綺麗というよりは、悔しいが、素敵だった。

桜並木の道を出て、ローカル線沿いの工場と小さな駅に挟まれた場所にあるスーパー銭湯は、ロビーが一面ガラス張りという開放的なもので、それが逆に閉塞感を際立たせているようにも見える。

…。
いっそ、男湯と女湯も、せめて曇りガラスで仕切られてたらなあ

「どうしたの？ ぼつとしちゃって」

「ん！？ いや、なんでもない！」

「ならいいけど…。さあ、お風呂で今日の疲れを癒しましょう」

「おっ！」

やべ、変なこと考えてるのバレてるかと思った。

気を取り直して建物に入ると、カウンターの前に説明書きがある。

『当入浴施設は混浴となっております。なお、空室時には貸し切り浴室もご利用いただけますので、ご希望のお客さまはフロント係員までお気軽にお申し付け下さいませ。』

おおっ！！！！ 混浴っすか！？ マジっすか！？ 夢じゃないよな！？ 錯覚じゃないよな！？

コッソッソ！

「いてっ！ 何すんだよ！」

「何か変な事考えてるみたいだから頭叩いてみた」

うお、今度は変な事考えてるのバレたか。悪ガキ浸地、恐るべし
…。

「さ、入ろ 大浴場でまた会おうね」

「お、おう…」

流石に脱衣所まで男女共用とはいかず、浸地と一旦別れた。期待を胸に、高鳴る鼓動。ルンルン気分でいざ、大浴場！！

俺一人しかない静かな脱衣所の扉の向こうから、わいわいがやがやした声が響いてくる。客入り上々！ 大事なトコロはタオルで隠して突撃準備完了！ 曇りガラスの扉の向こうはパーラダーイス！！

…の筈だった。

希望の光が見える脱衣所という洞窟の先は、もわくくと湯気が身体中を覆う断崖絶壁。その先にも地面は続いていると疑わなかった冒険家に突き付けられた残酷な現実。なんて事だろう、俺のにやけ顔は、一気に深い森に迷い込んで絶望に暮れる冒険家のものへと変わった。

要するに、混浴には、ウラがある。初めて知ったぜ…。

「あたしネ、これ全部入れ歯なのヨー！」

うわ、入れ歯外してる…。

「あらヤダ、私の髪はカツラなのヨ！」

あら、ハゲてらっしやる。円形脱毛ってヤツですね！

「お互い苦労が多いと大変ねえ」

見渡す限りお年を召された方々ばかりやん！

「あら奥さん見て見て！ 若い男の子よ！ ちょっとグンソクちゃんに似てなあい？」

やべえ、おバアさん二人組に目え付けられた…。

「おや本当。美味しそうねえ。パクツと頂いちゃおうかしら、ソーゼージ」

に、似てねえよ…。韓流スターはんりゅうに似てるなんて言われた事ねえよ…。なんだよ、その『まもっこり』みたいなイヤらしい目つき…。まるでたった今までの俺じゃないか…。それに、そ、ソーゼージって何の事だよ…。ガクガクガクガクぶるぶるぶるぶる…。やだ、怖い、怖いよおおお…。ひ、浸地はまだか…。

シャワーを浴びていたおバアさんたちは重たそうに腰を上げて立ち上がり、不敵な笑みでこちらへゆっくり近寄っている。俺は脚が震え、蛇に睨まれた蛙のように動けない。

「ねえねえお兄さん、アタシ、『いちご』っていうんだお」

「アタシは妹の『みるく』だお」

嘘だろ。偽名だろ。名前と語尾イタイぜ？ 年齢考えろよ。いやむしろこのくらいになるとやりたい放題か？

それを察してか、二人が見事に八毛る。

「ちなみに『いちごみるく』は、ほ・ん・みよ・う　　うぶぶつ

」

うづうづ！ 浴場は暑いくらいなのに「うぶぶつ」って語尾で全身に寒気走った。それに『いちごみるく』本名かよ！？ ならしようがねえなあこんちくしょう！！

「アタシたち、さくらんぼ狩りに来たの」お」

さくらんぼ！？ まさかおバアさんズ、俺がまださくらんぼを摘まれてないの知ってるのか！？ でもな、俺のさくらんぼは可愛い娘か美人で綺麗なお姉さんに摘み取ってもらうんだ！！ おバアさんズに渡す訳にはいかねえ！！

しかし意志とは裏腹に、脚の震えが止まらない。どうする？ どうなる俺！！

さくらんぼ少年と歩く嫌がらせの再会（後書き）

今後この作品の舞台とさせていたいただきます福島県の会津は自然に恵まれ、時間を忘れさせてくれるとても素晴らしい場所、なかでも「五色沼」は秋の紅葉スポットとして是非おすすめしたい場所です。ほかにも温泉など楽しめるスポットが多く点在しておりますので、東北、関東やお近くにお住まいの方はご都合よろしければ行楽に訪れてみてはいかがでしょうか。

また、主人公たちが住む神奈川県も横浜、湘南、箱根といった楽しいスポット満載です。富士山を臨む湘南の海辺の夕陽はとも口マンチックですよ。

銭湯ウォーズ

ここはスーパー銭湯、俺はいま、いちご、みるく姉妹（推定75歳前後）に『さくらんぼ』を摘み取られようとしている！！俺のさくらんぼは綺麗なお姉さんに摘んでもらうって決めてるんだ。バアさんに摘み取られるなんて冗談じゃねえ！！

「お兄さん、気持ち良くして、あ・げ・る」

「い、いや、いいです、え、遠慮します…」

クマから逃げるように、いちごみるく姉妹と視線を逸らさないようにしつつ、震える脚でそつと後ずさる。

しかし、相手はクマではなかった。

「それじゃ、いざ、実食！！」

「うああああああ！！」

来るな来るな来るな来るなあああああ！！

いちごみるくが俺という餌を目掛け浴場で全力疾走！！餌になりたくない俺も全力疾走で逃げる！！周囲の入浴客から注目を浴びているけど誰も助けてくれない。それどころかどいつもこいつも楽しそうにゲラゲラと笑いながら観察してやがる。ああ、世間は冷たいなあ。

逃げながらふと背後を振り返る。

あれ？ 一人しか追ってきてない。

ドスッ！！

やべっ、何かにぶつかった。

その衝撃で、俺はタイルの上に転んでしまったのだが、それにし
ては柔らかい。

「むふふふふ 押し倒すなんて、積極的なんだからっ」

ガタガタガタガタぶるぶるぶるぶる……。俺、今、何を触ってるん
だ……。

脚を曲げて巻いているタオルをひらひらなびかせながら太ももを
見せつける、いや、魅せつけて誘惑するおバアさん。

うつつ、ぽかぽかなお風呂なのに全身に凄まじい寒気を感じる。
これじゃ俺が襲ってるみたいじゃねえか。

俺の行く手に先回りしていた『いちごみるく』姉妹のどちらかに
ぶつかって押し倒してしまった俺は、恐ろし過ぎて浴場の中心で生
命の危機を叫びたい。しかし声が震えて叫べない。

「あ、う、いや……」

両サイドはシャワーの壁、前後にいちごみるく、逃げ場がない。
袋の鼠ってやつだ。

俺がバアさんたちに追われる一方、先程から浸地の悲鳴が聞こえている。アイツも誰かに追われてるのか？

「良いではないか、良いではないか」

「いやーっ！！ あっち行け！！ 銭湯じゃなくてソープ行けーっ！！」

ズコンッ！ バコンッ！ ドン！！

立ち上がって見渡してみると、浸地が浴場の外周を走り回っているのが見えた。どうやらお爺さんたちに追いかけられているようだ。浸地は洗面器やイスを投げつけたり罵声を浴びせたりして必死に抵抗しているとみた。先程からの鈍い音は、投げ付けた物がお爺さんたちに命中した時の衝撃だろう。

「うおおお、刺激的な姉ちゃんじゃねえか」

「玉を狙って来るとはのう…」

浸地が投げた洗面器やお風呂用の椅子がお爺さんたちの下半身の息子さんに直撃したようで、彼ら二人はムンクのような表情で、しかし両手はアソコをカバーしながら悶えている。浸地に手を出そうとしたのはまずかったな。幼き頃にされた嫌がらせの数々が走馬灯のように蘇る。

「グンソクちゃん、キモチイイコト、し・ま・しよ」

イケメンに似てるって言われるのは光栄ですが、残念ながら似てませんよ。

「さあさあさあ！！ 気持ち良くなっちゃいましょ！！」

おっと、同情と同時にタオルの下は生まれたままの浸地にさりげなく見惚れてる場合じゃなかった。俺も逃げなきゃ。

「あ、徳光さん」

「「えっ！？ うそ！？」」

掛かったな。地元にゆかりのある人ならここに来てても不自然じゃないからな。下手にジャニーズとかイケメン俳優を挙げるより騙されやすいって計算さ。

「サヨナラお元気でー！！」

挨拶して猛ダーツシュ！！

寝転ぶバアさんの横を透かし、浸地によって屍のような姿とさせられたお爺さんたちに躓きながらも脱衣所へ必死に逃げる、逃げる、逃げるーっ！！

「「待てやゴルアアア！！ タマむしり取ったるぜおのれえええええー！！」」

うぎゃ あああああああああつ！！ ゾンビ来やがったああああああ！！？

いちごみるくが屍と化したお爺さんたちのタマを掴んでその身体をぶん回しながら本性剥き出しにして陸上選手みたいな迫力で追っ

て来やがった！！ しかもなんでこんな台詞まで八モってんだよ！？

恐ろし過ぎるよ！！ 昔のド○えもんみたいな声が恐ろしさに拍車かけてるよ！！ やべえマジで俺の息子殺される！？ お爺さんたちをハンマー投げみたいにして俺にぶつけて倒す気だよ！！

「おーりゃーっ！！ 長年の恨みじゃー！！ ちったあ役に立ちやがれー！！ イ ポ野郎のくせに若い姉ちゃん見てビンビンしてんじゃねえぞゴラー！！」

びゅううううん！！

お爺さんロケット二発一気に飛んできたーっ！！ 長年の恨みつて、もしかしてこのお爺さんたち、いちごみるくの旦那さん！？ 旦那さんたち、浸地を見てビンビンするならイ○ポじゃねえだろ！！ てかいちごみるく、人をハンマー投げの道具にしちゃアカンぜよ！！

ドスドスッ！！

お爺さんたちは気を失ったままタイルに叩き付けられた。て鼻から血を流している。可哀相に…。

発射されたお爺さんたちを避けた俺は、そのまま更衣室に逃げ込み扉の鍵を閉めて難を逃れた。

「ヒロシ」

汗と蝉せみの雫でとつても香かぐわしい衣類を息を止めながら着てロビーへ出ると、浸地が手を振って俺を呼んだ。なんかスツキリ爽快な顔してるな。凄くイキイキしてる。

「あゝ風呂入ったら余計疲れた」

「入り直そうか。貸し切りの所に」

「お、おう」

浸地と風呂に入るのは今回が初めてだ。仮に初めてじゃないとしても幼少期とはお互いに色々と全然違う。緊張する。めっちゃ緊張する。俺の息子、暴れん『棒』將軍にならないだろうか？ 悪ガキ浸地とはいえ現役女子大生。しかも何故か悔しいがかなり美人。年上好きな俺にとってはもろにストライクゾーンという訳だ。

「どうしたの？ 早く入ろうよ」

「おう」

いかにいかに、オドオドしていると悟られちまう。俺は貸し切り風呂へ向かう浸地の後を少し早足で追った。

「後ろ向かないでね」

「なるべく」

まさかの脱衣所共同かよ！！ 大人二人用の風呂だから有り得な

い話じゃないけど、いや有り得ないか？ どっちにしる困るんだよ。さつきから俺の息子暴れたくてうずうずしてるんだよー！！

ああ、見たいけど見れねえ。見たらボコられるならまだしも、小さい時にウシガエルで顔面パンチしてきた女だ。大人になった今となれば、家にクマとかワニとかライオンなんか送り込まれるかもしれん。いや、地味にへビとかタランチュラとかだろうか。

「広視、もうこっち見ていいよ」

タオル巻き終わったのか。

「おう」

素っ気ない返事をしながら、内心ドキドキワクワクで振り向くと、浸地は少し頬を紅く染めて、背を向けたまま、顔だけこちらを向いていた。

「うわあ、すっげえ綺麗だ。」

「ごくり。胴だけ白い絹一枚に包まれた浸地の白い柔肌と曲線美、すらりと伸びた脚と華奢な腕に見惚れて思わず唾を飲み込んだ。やばい、見返り美人を前に理性が崩れ落ちそうだ。」

「だっせー、両手半分日焼けして赤くなってやがる！」

「もう、それはお互いさまでしょ」

素直に「綺麗」と言えず茶化す俺に、浸地は頬を紅に染めたまま言い返した。

小さい頃から知ってた。浸地は凄く可愛い女の子だと。でもそんなこと、口に出せなかった。悪戯されっ放しの悔しい思いと照れ臭さが口を塞いだのだ。

高ぶる鼓動を抑えつつ、俺は浸地に少し遅れて浴室へ入った。檜ひのきで出来た少し大きな浴槽は、人が十人くらい入れそうだった。浸地は浴槽の縁に簪かんざしを用いて丸く束ねた髪を乗っけてもたれ掛かり、ゆつたりと脚を伸ばし寛いでいる。俺という狼が襲い掛かることを警戒している様子はない。いや、俺が襲い掛かったところで、さっきのお爺さんたちみたいに返り討ちにされそうだった。

俺も恐る恐る浴槽へ浸かり、浸地の横に落ち着いた。檜の香りが高ぶる鼓動を少し落ち着かせ、ちやぽちやぽと掛け流しのお湯が流れる音が響くが、会話なく暫しの沈黙が続いた。

「広視は何か悩みとかある？」

そう訊かれて真っ先に思い浮かぶ悩みは家庭問題だが……。でもそれ相談したら重たい空気になりそうだし、ここは当たり障りない青春らしい話題にしておこう。

「うーん、そうだな、高校入ってから、中学の時と比べて女子が構ってくれなくなったのは悩ましいな」

「モテたいの？」

「いや、モテたいのは確かなんだけど、それは別として、特に小学校も一緒だった女子たちに嫌われちゃったのかと不安に怯えてる訳ですよ」

「なるほどね〜」

数秒だけ間を置いて、浸地は右の頬に人差し指を押し付けて何か考えるような素振りで再び話し始めた。

「それはきつと、女の子たちに彼氏ができたとか、広視自身が変わったとかじゃない？」

「俺が、変わった？」

確かに、ケータイ買ったり、オシャレに少し気を配ってみたり、髪にワックス付けたりするようになったな。今日は祭のボランテイアだから半ジヤージに白いＴシャツというラフで機能的なスタイルだが。でもオシャレとか髪ワックスだって、した方がモテるんじゃないのか？

「うん。でも変わるのには広視だけじゃなくて、高校生って、そういう年頃なんだと思う」

「変わる、ねえ…。確かにクレペリン検査では情緒不安定って判定されたけど、それは人格を形成する過程だったりすんのかな？」

補足説明すると、俺が通う湘南海岸学院では、性格検査を兼ね、将来訪れる就活の参考として、どんな職業に向いているかを見極めるためにクレペリン検査を実施している。

「私が高校生の時なんか、恥ずかしい事とか、悪い事もしちゃったりして、いつしかふと過去を顧みると、あの頃の自分はどうしようもない人間だったって、過去を修正したくなるくらいだよ」

「つまり浸地は、今の俺はイタイ人間だと言いたいのか？」

「何を今更。広視はちっちゃい時からイタイ所あるよ」

グサツ！ そりゃ重々承知だけどさ！ まあいい、今はそれに
ついてどうこう言つより話を続けよう。

「ってことは、イタイ人間なのが原因で構ってもらえなくなっ
たって訳じゃないよな」

「うーん、広視が中学から高校に至るまでの過程を知らないから何
とも言えないけど、そういうのって、私みたいに後で自ずと解るん
だと思つよ」

「うーん」

「私が言えるのは、今の広視は育ち盛りだつてことだ！ 迷惑にな
らない範囲ではっちゃけたり、色んな葛藤をしたりしておつきくな
るんだよ」

浸地は偉そうに言いながら、ポンポンと肩を組んで俺の左肩を軽
く叩いた。俺が柔らかい二の腕と、胸の感触にドギマギしているこ
とに気付いているだろうか。

「ところで、浸地が高校生の頃にした恥ずかしい事とか悪い事つて、
どんな事？」

「それは日を改めて話すよ。せっかく再会出来たんだから、時々会
つてお話ししようっ」

「そうだな。じゃあ別の質問。浸地ってCカップ？」

祭のボランティアで顔合わせした時からずっと気になっていたの
で、つい間髪入れずに質問してしまった。

「エッチ」

「いや流石にHカップじゃないだろ」

「そうじゃなくて、私の事そういう目で見てたんだ、ってこと」

浸地は頬を赤らめながらムスっとした表情で俺を軽く睨んだ。

「そりゃそうだろ、そういう年頃だし」

お互いそういう配慮があってタオル巻いてるんだし、浸地だって
脱衣所で「後ろ向かないでね」って言ったじゃないか。

「そうだよね、私もね、お風呂入ろうって提案した時は何の気なし
だったけど、いざ脱衣所に来ると緊張した」

浸地は少し照れながらも柔らかく、優しい表情で少し目を細め、
幼少期を懐かしんでいるようだ。俺にとっても福島で浸地と過ごし
た日々は懐かしく、嫌がらせは多々されたが、良き思い出だ。

「ガキの俺なんかに見られるの恥ずかしかってるようじゃ、まだま
だだな」

「恥じらいがなくなったら女は終わりなの」

「だな、俺も例え若い女でも露出狂には引いちまっわ」

「でしょ？」

「ははははっ！」「」

「よし、広視、頭と背中洗ったげる！　広視が小さい頃、頭触られるの好きだったよね」

「よく覚えてるな。なんだか気持ち良くてな。じゃあよろしく頼むわ」

それから俺は、浸地に頭や身体を洗ってもらったり、じっくりマッサージしてもらった。そのお返しに浸地にも同じ事をしようとしたら、ついでにあちこち触るつもりでしょ？　と断られた。セクハラ男扱いなんて、全く失礼な話だ。俺のことよく理解してるじゃねえか。

せめてもと思い、半ば強引に背中流しをした。もちろん背中以外には触らないよう欲情を抑えながら。

それはそうと、浸地の背中つて、あんなに華奢で小さかったっけ？　会わない間に俺の方が大きくなったんだな。

「くはああああ、うんめえ！」「」

風呂上がり、ロビーに出た俺たちは、二人揃って腰に手を当て、

瓶入りの牛乳をぐいっと一気飲み。これがたまらなくうんまい。所持金十円の俺は、また浸地の世話にかかってしまった。次に会った時は何かご馳走しなきゃな。

「よし、牛乳飲んだところで、そろそろ帰りますか」

「そつだな。今日は色々ありがとな。おつかれさまです」

「うん、おつかれさま。今日は久しぶりに広視に会えて嬉しかったよ」

「う、うん……」

「こつこつ時、どう返事すべきかなんて解っているけど、それが素直に出来なくてもどかしい。

18時20分より少し前、俺たちは茅ヶ崎駅ちがさきえきの東海道線ホームでベンチに腰掛け、電車を待っていた。所持金十円でも定期券を持っているので電車には乗れる。

俺は藤沢ふじさわに住んでいるので上りの東京方面、浸地は小田原おたわらに住んでいるので下りの熱海あたま方面の電車に乗るため、ここでお別れとなる。

少し陽が陰ってきて、富士山をバツクに空が徐々に茜色に染まってきた。この時間がなんとなく好きだ。

程なく5番線に、15両編成、全長300メートルと長い東京行きの電車が、ウィィィィン！！　グオオオオオン！！　と、勢い

良く滑り込んできた。時速80キロ以上は出ているだろうが、それでも停止位置にピタリ止まる。

「広視、電車乗らないの？」

電車が来たのにベンチから立ち上がらない俺を、浸地は促す。

「俺は浸地を見送ってから行くよ。次の電車は四分後に来るから」

そんな会話をしている途中、反対側の6番線に下りの伊東行きいとうの電車がゆっくり入って来た。5番線のものとは違う、少し古いタイプだ。

「そうか。じゃあ私はこれに乗ってくね」

降車客が居なくなり、発車メロディーが鳴り始めたタイミングで浸地は電車にちょこんと乗り、出入口の前で立ち止まって俺の方へ振り返った。

「今日は本当におつかれさま。帰ったらゆっくり休むんだよ」

「浸地もな。おつかれさま」

あ、なんか今、素直に笑顔になれた気がする。

「うん、じゃあね」

「じゃあな」

「あと、私には、何でも遠慮なく相談してね」

ポイツ。

「えっ？」

浸地が俺に向かってお手玉くらいの透明の小袋を投げ渡した。

プシューッ、ガタン。

投げてから、浸地が優しい笑顔を向けてくれたところでドアが閉まり、電車はゆっくりと富士山が聳える夕陽そひへ向かって走り出した。

なんだこれ？ 中にビーズがびっしり詰まってるぞ。赤、緑、青、金、銀、その他色々。カラフルで綺麗だな。

俺は疑問を抱えたままホームの端へ向かい、暮れなずむ遠くのカ
ーブの向こうへ電車が消えてゆくのを見送った。それと入れ替わり
で現れた湘南新宿ラインに乗り、俺は帰路に就いた。

「私には、何でも遠慮なく相談してね」

車中、別れ際の浸地の優しさが、俺の脳内で何度もリフレインし
ている。

俺の事なんか、お見通しなんだな。年月が経って大きくなっても、
やっぱり浸地には敵わないや。

小さい頃から知ってた。浸地は可愛いとか美人なだけじゃなくて、

とても心温かくて優しい女の子だと。だからその、俺にとって初めての、胸が苦しくなるような、なんていうかだということ。

藤沢駅に到着すると、俺は水を買ったため目の前のホーム上にあるキヨスクに入った。このキヨスク、オレンジとグリーンのツートンカラーに塗り分けられた、きつと昔走っていたであろう古い電車を模^{かたど}って、駅のちよつとした名物だ。

おっと、見知った貧乳が居^おるではないか。

貧乳は俺が買おうとしているのと同じ水の会計をしていて、会釈して店員からそれを受け取った所で俺の存在に気付いたようだ。

「げっ、広視!？」

「げっ、て何だよ!」

貧乳こと烏帽子^{えぼし}アロハは、中学一年から高校二年の現在に至るまで同じクラスで、部活では、俺がヴォーカルをやってるバンドのベイスリスト。身長は160センチと、女子としてはやや高い。軽くパーマのかかったベージュのロングヘアが特徴だ。

「そりゃ、性欲が歩いてんの見たら『げっ』てなるでしょ」

「おいっ!?! ちよつとちよつと!! それじゃ俺が歩く性欲みたいじゃん!?!」

「だからそう言ってるじゃない」

「うおおおおっ！！ ひでえ！！ お前あれだ、名誉棄損だ！！」
「二人とも、楽しそうだね」

残念ながら全然楽しくない口論の途中、にこっ、と天使のような声で微笑みで現れたのは、アロハの買物待っていた烏帽子オハナちゃん。アロハと違ってとても穏やかな性格で、男子にも人気だ。浸地と同様、長くて艶やかな黒髪が特徴だが、浸地の明るく爽やかな顔立ちに対し、オハナちゃんは少しお嬢さまっぽく、気品のある顔立ちをしている。

アロハとオハナちゃんは同じ年、同じ日に生まれた姉妹であるが、双子ではない。これについては後に語るとしよう。

「広視くん、それなあに？」

オハナちゃんは俺が手に持ってるビーズの入った袋を見て言った。

「あっ、そうそう、私も気になってた。ビーズなんて、広視らしからぬ可愛らしいもの持ってるから」

悪かったな、可愛らしいものが似合わなくて。

そんな気持ちを抑えつつ、二人の問いに俺は、さきほど茅ヶ崎駅で幼なじみから貰ったもので、どういう意図でこれを俺に渡したのかよく分からないという旨を伝えた。

ホント、何なんだろう、これ。今日は疲れてるだろうから、明日浸地に電話して訊いてみるか。

翌日、俺は漫地に電話をかけてみた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0780y/>

いちにちひとつぶ2

2012年1月3日00時46分発行